

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
11047	琉球文学	2単位 前期	1~4	講義	波平 八郎

■テーマ

琉球文学の文学史の概要を理解する。

■授業概要

本講義では、主に琉球語によって形づくられた作品を概観する。作品のジャンルは(1)歌謡、(2)琉歌、(3)説話文学、(4)劇文学、である。また、(5)沖縄の近代文学の作品も取りあげる。さらに、沖縄に関係のあるさまざまな作品を(6)その他、として紹介する。

■到達目標

琉球語によって表現された文学作品を鑑賞することができるようにする。また、沖縄の文学史を説明できるようにする。

■授業計画・方法

- (1) 履修ガイダンス
- (2) 歌謡 (1)
- (3) 歌謡 (2)
- (4) 琉歌 (1)
- (5) 琉歌 (2)
- (6) 琉歌 (3)
- (7) 琉歌 (4)
- (8) 琉球説話文学 (1)
- (9) 琉球説話文学 (2)
- (10) 評論 (1)
- (11) 評論 (2)
- (12) 沖縄の近代文学 (1)
- (13) 沖縄の近代文学 (2)
- (14) 沖縄の近代文学 (3)
- (15) 定期試験および解説・まとめ

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

一つの作品 (または作家) についてのレポートをまとめ、授業中に発表することが求められる。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点 (出席を含む30%)・レポート (20%)・試験 (50%) を総合的に判断する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献 等

□教科書

沖縄県教育文化資料センター編『新編 沖縄の文学』(沖縄時事出版)

□参考文献 (作品)

適宜授業中に指示する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
12024 (12019)	琉球沖縄史A (琉球史A)	2単位 前期	1~4	講義	麻生 伸一

■テーマ 琉球・沖縄史から今の沖縄を考える

■授業の概要

「史実」や年号を覚えることが歴史の勉強ではありません。また、歴史は社会に出てからは役に立たないものでもありません。ものごとを批判的に捉え、多角的・多面的に見つめることが歴史学の醍醐味のひとつです。この講義では、政治史や外交史、社会史、民衆史などさまざまな角度から琉球の歴史を掘り下げ、近代以前の琉球沖縄に関する理解を深めることを目的とします。ただし、通史ではなく、琉球沖縄の特質を示す個別テーマを採り上げ、「沖縄」「日本」「東アジア」「国家」「民族」を考える講義をめざします。

また講義中は指名して意見を求めます（けっこうあてると思います）。

■到達目標

- ・現在の沖縄が置かれた立ち位置を歴史的な文脈から説明することができる。

■授業計画・方法

1. ガイダンス
2. 伊波普猷と「琉球」
3. 首里を歩く：首里巡検
4. 沖縄人（琉球人）はどこからきたか？
5. グスク時代の外交と社会
6. 書状から近世琉球を考える
7. 誓約書から近世琉球を考える
8. ラクダから近世琉球を考える
9. 国王即位から近世琉球を考える
10. 暦（カレンダー）から近世琉球を考える
11. 祖先崇拜から近世琉球を考える
12. 自然災害から近世琉球を考える
13. シヤーマンから近世琉球を考える
14. 民衆統制から近世琉球を考える
15. 蔡温から近世琉球を考える

定期試験は実施しない

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・レポート（課題論文の論評／博物館見学の感想文、それぞれ1200字程度）の作成を求めます。

■成績評価の方法・基準

□方法 レポート（2回／70%）と平常点（リアクションペーパー、講義への参加度／30%）で評価します。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価します。

■教科書・参考文献（資料）等

□参考文献

- 高良倉吉『琉球王国』（岩波新書、1993）
 豊見山和行（編）『琉球・沖縄史の世界（日本の同時代史18）』（吉川弘文館、2003）
 安里進ほか『県史47 沖縄県の歴史』（山川出版社、2004）

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
12025 (12020)	琉球沖縄史B (琉球史B)	2単位 後期	1~4	講義	麻生 伸一

■テーマ 琉球・沖縄史から今の沖縄・日本を考える

■授業の概要

「史実」や年号を覚えることが歴史の勉強ではありません。また、歴史は社会に出てからは役に立たないものでもありません。ものごとを批判的に捉え、多角的・多面的に見つめることが歴史学の醍醐味のひとつです。この講義では政治史や外交史、社会史、民衆史などさまざまな角度から琉球の歴史を掘り下げ、近代以降の琉球沖縄に関する理解を深めることを目的とします。ただし、通史ではなく、琉球・沖縄の特質を示す個別テーマを採り上げ、「沖縄」「日本」「東アジア」「国家」「民族」を考える講義をめざします。

また講義中は指名して意見を求めます（けっこうあてると思います）。

■到達目標

・現在、沖縄が置かれた立ち位置を歴史的な文脈から説明することができる。

■授業計画・方法

1. ガイダンス
 2. 河上肇・島尾敏雄と「日本」「南島」
 3. 金城哲夫の「沖縄」
 4. 「琉球人」と「沖縄人」
 5. 語られる琉球・沖縄史
 6. ドラマのなかの近世琉球
 7. 米兵の犯罪を考える
 8. 宮古島と近代
 9. 公同会運動と沖縄の自治
 10. 近代教育の導入と「沖縄語」
 11. 首里という都市空間：首里巡検
 12. 沖縄と「移民」
 13. 沖縄とマイノリティ①
 14. 沖縄とマイノリティ②
 15. これからの「沖縄人」の生き方／まとめ
- 定期試験は実施しない

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

・レポート（課題論文の論評／史跡見学の感想文、それぞれ1200字程度）の作成を求めます。

■成績評価の方法・基準

□方法 レポート（2回／70%）と平常点（リアクションペーパー、講義への参加度／30%）で評価します。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□参考文献

- 豊見山和行（編）『琉球・沖縄史の世界（日本の同時代史18）』（吉川弘文館、2003）
 安里進ほか『県史47 沖縄県の歴史』（山川出版社、2004）
 鹿野政直『沖縄の戦後思想を考える』（岩波書店、2011）

科目番号	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
12032	民俗学	2単位 前期	1～4	講義	赤嶺 政信（非）

■**テーマ** 民俗学からみた沖縄の社会と文化の特徴について学習する。

■授業概要

民俗学の研究対象である民俗とは、一定の地域で生活を営む人々が、その生活や生業形態の中から育み、伝承してきた生活文化やそれを支える思考様式であると規定できる。本講義では、日本における民俗学の成立の事情および日本民俗学の方法論などについてまず学習し、その後、沖縄の事例を中心に個別のテーマごとに取り上げていく。

久高島の民俗探訪も実施する。

■到達目標

沖縄の民俗文化について、その背景やそれが有している意味などについて理解することができるようになること。

■授業計画・方法

- (1) オリエンテーション
- (2) ムラの掟と制裁
- (3) 女性優位と男系原理－オナリ神信仰をめぐって－①
- (4) 女性優位と男系原理－オナリ神信仰をめぐって－②
- (5) 母系制社会のしくみ
- (6) 沖縄の家と門中
- (7) 沖縄の豊年祭
- (8) キジムナーの民俗学
- (9) 祖先祭祀とその成立
- (10) 霊魂と死霊観念
- (11) 綱引きの民俗
- (12) 久高島の民俗
- (13) 家屋と世界観
- (14) 沖縄における津波に関する伝承
- (15) 講義のまとめ・期末試験

注：順序は変更があり得る

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

特になし

■成績評価の方法

□**方法** 平常点（30%）、期末試験（70%）にて評価する。

□**基準** 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（作品）等

□**教科書**：特になし

□**参考文献**：赤嶺政信著『シマの見る夢－おきなわ民俗学散歩－』 ボーダーインク、¥1,600

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
13052	自然環境論	各2単位 前・後期	1~4	講義	藤田 喜久

■テーマ 沖縄の自然環境の保全

■授業の概要

沖縄の様々な自然環境とそこに暮らす生物を主な対象として、生物と環境との関わり、生物と人との関わりについて概説する。また、地球規模または地域（沖縄）規模で生じている環境問題や、自然環境保全の為に必要な様々な試み（法律・条約、調査研究、教育啓発活動、市民活動など）についても紹介する。

■到達目標

- ・沖縄の自然環境・生物に関する基礎的な知識を習得する。
- ・沖縄の自然環境や生物の特性や、沖縄の人や暮らしとの密接な関わりを理解する。
- ・沖縄の自然環境の現状を理解し、活用・保全していくための手段について自らの考えを持つ。

■授業計画・方法（前期・後期共通）

パソコンによるプレゼンテーションを主とし、視覚資料（DVD等）を利用して講義を進める。
また、大学構内外での自然観察を行う可能性もある（ただし、天候条件による）。

1. 講義ガイダンス：沖縄の自然環境
2. 河川環境と生物
3. 地下水・湧水環境と生物
4. 干潟環境と生物
5. マングローブ環境と生物
6. サンゴ礁と生物①：サンゴとサンゴ礁
7. サンゴ礁と生物②：サンゴ礁海岸の微環境
8. サンゴ礁と生物③：サンゴ礁潮間帯の微環境
9. サンゴ礁と生物④：サンゴ礁潮下帯の微環境
10. サンゴ礁と生物⑤：サンゴ礁の価値と保全
11. 沖縄の生物多様性の危機①：沖縄の自然環境の重要性とその現状
12. 沖縄の生物多様性の危機②：外来生物と採集圧の問題
13. 沖縄の生物多様性の危機③：海岸漂着物問題
14. 沖縄の危険生物 / 野外散策のススメ
15. まとめ（定期試験は実施しない）

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・毎回の講義では、講義内容を要約したプリントを配布する。授業時間外の宿題として、ごく簡単なレポート課題を不定期に与えることもあるので、毎回の講義を欠席しないようにすること。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（45%）、不定期課題（30%）、期末レポート（25%）の内容で総合的に判断する。「平常点」は、授業への参加状況と毎回のコメントペーパーの内容により総合的に判断する。「不定期課題」は、授業時間外の宿題として、ごく簡単なレポート課題を不定期に与え、提出状況と提出内容により評価する。「期末レポート」は、期末試験の代替として課し（提出期限の2週間前までに課題を提示する）、提出内容により評価する。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（資料）等

□教科書：特に指定せず、毎回講義時に資料を配布する。 **□参考文献**：講義中に適時教示する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
14041	沖縄学	2単位 前期	1～4	講義	久万田晋・鈴木耕太・新田摂子 (コーディネーター)

■テーマ 組踊について多角的に考える

■授業概要

本講座は、1719年に初演され、今年で300年の節目を迎える「組踊」について学ぶ事を目的としている。

組踊は琉球古典語、琉球古典音楽、琉球舞踊を基本とした所作の3つの要素で構成された琉球の古典劇である。尚敬王冊封の際、躍奉行に任命された玉城朝薫によって創作され、その後の行われた冊封の宴席に必ず供される芸能であった。

明治以降は各地の芝居小屋や村芝居などで演ぜられ、戦後は国の重要無形文化財に指定される。現在は組踊の地謡・立方ともに人間国宝に指定され、若手の育成や「新作組踊」の創作など、今後の組踊という芸術の展開も期待できる。

本講座は組踊の記念すべき年に、研究・実演の分野から専門家を招き、組踊についてさまざまな立場・角度から最新の研究成果や芸談を語っていただき、組踊そのものや組踊研究に興味を持っていただく内容としたい。

■到達目標

組踊という芸術文化についての的確に把握し、理解すること。

■授業計画・方法

※各講師の日程・講義内容は変更の可能性があります。

- 第1回 (4/3) オリエンテーション (全体テーマ：組踊を多角的に考える) 久万田晋・鈴木耕太・新田摂子
- 第2回 (4/10) 鈴木耕太 (附属研究所専任講師) 「組踊とは～鑑賞のすすめ」
- 第3回 (4/17) 崎原綾乃 (琉球大学附属図書館専門員) 「近世における組踊上演について」
- 第4回 (4/24) 鈴木耕太 (附属研究所専任講師) 「近代～戦前における組踊上演について」
- 第5回 (5/8) 茂木仁史 (国立劇場おきなわ運営財団調査養成課長) 「組踊と舞台」
- 第6回 (5/22) 麻生伸一 (全学教育センター准教授) 「冊封と芸能～儀礼としての観点から」
- 第7回 (5/29) 我部大和 (附属研究所共同研究員) 「故事集～組踊の漢訳について～」
- 第8回 (6/5) 西岡敏 (沖縄国際大学教授) 「組踊の台詞について～敬語表現から」
- 第9回 (6/12) 金城裕幸 (組踊道具・衣装製作技術者) 「組踊の小道具について」
- 第10回 (6/19) 新垣俊道 (本学非常勤講師・「子の会」代表) 「組踊と琉球古典音楽」
- 第11回 (6/26) 嘉数道彦 (国立劇場おきなわ芸術監督) 「新作組踊について」
- 第12回 (7/3) 宮城能鳳 (組踊立方人間国宝 県立芸大名誉教授) 「私と組踊」
- 第13回 (7/10) 西江喜春 (組踊音楽歌三線人間国宝 県立芸大名誉教授) 「私と組踊」
- 第14回 (7/17) 大城學 (琉球大学元教授) 「沖縄各地の組踊」
- 第15回 (7/24) 鈴木耕太 (附属研究所専任講師) 「組踊を研究すること」

■履修上の留意点 (授業以外の学習方法を含む)

受講生は毎回の講義で取り上げられる諸ジャンルの研究概況・作品等について、事前に学習しておく。各回の講義で取り上げられた参考文献に目を通して復習すること。

■成績評価の方法・基準

- 方法 出席状況 (40%) と期末レポートの評価 (60%) を総合的に判断する。
※レポートは、本講座全体について、あるいは興味を持った特定の分野・領域について執筆することとする。
- 基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。
琉球・沖縄芸術各分野特有の美意識について十分な理解ができているかどうか。
自分自身の演奏・創作と対象分野の関係性が適切に把握できているかどうか。

■教科書・参考文献 (作品) 等

講義の中で各教員が適宜指定する。

■備考

期間：2019年4月～2019年7月 (前期期間) の水曜日午後6時30分～8時00分

場所：沖縄県立芸術大学附属研究所3階小講堂

※第1回のオリエンテーションは4月3日 (水) 12時～12時30分 (当蔵キャンパス一般教育棟3階大講義室)

科目番号	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
15135	沖縄美術工芸史	2単位 後期	1~2	講義	小林 純子

■テーマ 沖縄美術工芸史の基礎知識

■授業概要

琉球・沖縄では、その歴史と風土を反映し、独特の造形と美意識が育まれてきました。残念ながら沖縄戦で文化財の多くが失われましたが、遺された作品や戦前の写真、これまでの研究成果によって、その概略を知ることができます。担当教員の実務経験を活かして、古琉球時代から現代に至るまでの、さまざまな美術工芸の歴史と特色を講義します。

■到達目標

- ・沖縄美術工芸史について基礎的な知識が備わり、作品を観察して造形的特徴を見出すことができる。
- ・沖縄美術工芸の歴史的背景、図像、技法等について文献を調査し、正確な情報を得ることができる。
- ・沖縄美術工芸史について、情報を整理し、さらに自分の意見を加味して、合理的な論述ができる。

■授業計画・方法

1. 沖縄の風土と美術工芸
2. 古琉球の漆芸
3. グスクと石造彫刻
4. 荒焼と上焼の系譜
5. 王都首里の織物
6. 宮廷画家の中国留学とその作品
7. 貝摺奉行所と近世漆器
8. 壺屋焼
9. 紅型の美
10. 島々の織物
11. 沖縄工芸の近代
12. 戦前・戦後の絵画
13. 工芸の復興と展開
14. 現代沖縄の美術工芸
15. まとめ。

定期試験は実施しない。

■履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）

- ・授業の前に教科書の該当箇所を読んでくること。
 - ・琉球・沖縄史の基礎知識が必要となるので、自習していただくことが望ましい。
- なお、レポート作成のために、美術館や博物館の入場料が必要になる場合があります。

■成績評価の方法・基準

□方法 平常点（20%）、コメントペーパー（20%）、学期末レポート（60%）を評価の対象とします。毎回の授業時間内に、その日の授業内容に関するコメントペーパーを書いてもらいます。また学期末にレポートを課します（詳細は授業中に知らせる）。

□基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価します。

■教科書・参考文献（作品）等

□教科書 宮城篤正監修『すぐわかる沖縄の美術』東京美術、2,310円

学期始めに大学に特設される販売所で購入できます。また県内大手書店、ネット書店でも購入可能。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
16141	琉球芸能文化論	2単位 後期	1~2	講義	長嶺 亮子 (非) 遠藤 美奈 (非)

■**テーマ** 琉球（沖縄）芸能の文化を概観する。

■**授業概要**

琉球芸能の基本構成を理解した上で、宮廷芸能の歴史、中国や日本本土との芸能の交流、琉球王国崩壊以降の新しい芸能、各地の祭祀や民俗芸能の諸相について概観する。また、ポピュラー音楽や沖縄系移民が移住先に伝えた芸能などを多面的に紹介する。

■**達成目標**

- ・琉球芸能の特色と、芸能に関わる歴史・文化・社会的背景を理解する。
- ・奄美、沖縄のさまざまな地域の(民俗)芸能を理解し、その特徴について説明できることを目指す。

■**授業計画・方法**

1. オリエンテーション、琉球芸能とは
2. 琉球音楽の基本構成、ポピュラー音楽への展開
3. 宮廷芸能
4. 琉球と中国の芸能
5. 琉球と日本の芸能、江戸上り
6. 廃藩置県後の芸能
7. 踊りワークショップ
8. 沖縄移民と芸能
9. 民俗芸能を概観するために
10. 島々の民俗芸能（沖縄本島）
11. 島々の民俗芸能（宮古諸島）
12. 島々の民俗芸能（八重山諸島）
13. 島々の民俗芸能（奄美諸島）
14. 琉球芸能を振り返る
15. 定期試験

■**履修上の留意点（授業以外の学習方法を含む）**

- ・ アジアにおける沖縄の地理、南西諸島（奄美・沖縄・先島・大東）の地図、沖縄県内各市町村の位置を把握しておくこと。
- ・ 履修者の住む地域や各家庭の風習などを注意深く観察しておくこと。
- ・ 学内外で上演される琉球芸能の公演のほか、県内各地の年中行事など、芸能が行われる現場に足を運んで欲しい。

■**成績評価の方法・基準**

□**方法** 平常点（30%）、試験（70%）

□**基準** 到達目標を寒天として、履修規定に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■**教科書・参考文献（作品）等**

□**教科書**：特になし。授業毎に資料を配布する。

□**テキスト**：授業毎に資料を配布する。

□**参考文献**：金城厚『沖縄音楽入門』音楽之友社、2006年。その他、授業毎に各テーマにあわせて紹介する。

科目コード	授業科目名	単位数・学期	受講年次	授業区分	担当教員名
11035	琉球語基礎	2単位 前期	1～3	講義	仲原 穰(非)

■テーマ 琉球語の基礎を習得する。

■授業概要

琉球列島で話されている伝統的な言語は、2009年にユネスコが「消滅の危機に瀕する言語」と認定されるほど話者が減ってきている。本講義で琉球語の基礎を習得することにより、家庭や地域で琉球語を話題にし、話しはじめる基礎としたい。本講義では、沖縄の伝統的な文化について学ぶ本学の教育内容や本学の位置する地域とのかかわりを念頭に、琉球語の中でも特に「首里方言」を中心に進める。講義では、沖縄のわらべうたやことわざなども取り入れ、琉球語の基礎的な構造を紹介していく。

■到達目標

1. 琉球語に関する基本的な知識を体系的に理解することができる。
2. 沖縄語の一つである「首里方言」の老年層の会話を4割程度理解することができる。
3. 「沖縄語」を用いて自己紹介や簡単な会話のキャッチボールを老年層(ネイティブスピーカー)と行うことができる。

■授業計画・方法

パソコンによるプレゼンテーション、板書、音声、その他様々な視覚資料を利用して講義を進める。

- 第1回 琉球語概説と首里方言の位置／自己紹介
 第2回 首里方言の母音の特徴
 ([準備]第1回に配付したプリントを読み込み、質問事項をまとめ、自己紹介を練習しておくこと)
- 第3回 首里方言の子音の特徴①／覚えて使える表現①
 ([準備]第2回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解くこと)
- 第4回 単語を覚えよう①(身体)／覚えて使える表現②
 ([準備]第3回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、覚えて使える表現①を覚えること)
- 第5回 肯定文の作り方／あいさつと言語文化
 ([準備]第4回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、身体語彙を覚えること)
- 第6回 単語を覚えよう②(季節、自然、空間)、首里方言の子音の特徴②、覚えて使える表現③
 ([準備]第5回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、覚えて使える表現②を覚えること)
- 第7回 数詞／沖縄のわらべうた
 ([準備]第6回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、表現③を覚え、季節、自然、空間語彙を覚えること)
- 第8回 疑問文と否定文の作り方
 ([準備]第7回に配付したプリントを読み込み、数詞を覚え、わらべうた①についての理解を深めること)
- 第9回 単語を覚えよう③(親族)
 ([準備]第8回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、文の作り方の理解を深めること)
- 第10回 変化する単語①(動詞の特徴)
 ([準備]第9回に配付したプリントを読み込み、親族語彙を覚えること)
- 第11回 単語を覚えよう④(住居、代名詞、衣服)
 ([準備]第10回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、動詞に関する理解を深めること)
- 第12回 「～が」の区別／沖縄のわらべうた②
 ([準備]第11回に配付したプリントを読み込み、住居語彙、代名詞、衣服語彙を覚えること)
- 第13回 変化する単語②(形容詞の特徴)
 ([準備]第12回に配付したプリントを読み込み、「が」の区別、沖縄のわらべうた②の理解を深めること)
- 第14回 複文(文をつなぐ単語)／覚えて使える表現④／これまでの補足
 ([準備]第13回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、形容詞に関する理解を深めること)
- 第15回 定期試験／まとめ
 ([準備]第14回に配付したプリントを読み込み、練習問題を解き、覚えて使える表現④を覚えること。
 また、第1回～14回のプリントを読み返し、練習問題などを解き直すこと)

■履修上の留意点(授業以外の学習方法を含む)

半期で首里方言の基礎を学ぶが、週に1度の講義であり、内容を把握し、身につけるためには講義後にプリントを振り返るなどの事後学習を行うとよい(30分から1時間程度)。方言だから簡単だろうなどと侮らず、新たな言語を習得するような心構えで取り組んでもらいたい。参考文献の『沖縄語の入門』を図書館などで借りて読むと理解が深まる。

■成績評価の方法・基準

- 方法 15 回に定期試験を実施する（60%）。また、毎回の講義終了時に提出する「リアクション・ペーパー」の記述内容も評価に加える（40%）。この2点で評価を行う。
- 基準 到達目標を観点として、履修規程に定める「授業科目の成績評価基準」に則り評価する。

■教科書・参考文献（作品）

□教科書 なし。講義用レジュメや資料を配布する。

□参考文献

- 『沖縄語の入門（CD付改訂版）—たのしいウチナーグチ—』西岡敏・仲原穰[著]、中島由美・伊狩典子[協力]（白水社、2006[2000]年）
- 『沖縄の言葉と歴史』外間守善[著]（中公文庫、2000年）
- 『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』内間直仁・野原三義[編著]（研究社、2006年）
- 『沖縄語辞典』国立国語研究所[編]（財務省[大蔵省]印刷局、2001[1963]年）